

第二百一話 戦争終末機会の捕捉を逸す！

大東亜戦争の攻守転換点は、ミッドウェー海戦とガダルカナル戦であると云われる。この両戦以降、日本は劣勢に追い込まれ、遂には敗戦の憂き目にあうこととなる。日本は終戦の機会を捕捉することも出来なかったのである。緒戦の大勝利の美酒に酔い痴れて、当初構想を逸脱したのは残念だ。その責任の過半は、時のG F司令長官と海軍軍令部にある。その状況を管見する。

1 南方作戦終了後の戦争指導構想

1942/3/7、大本営政府連絡会議は「今後採るべき戦争指導の大綱」を決定した。本構想は度々指摘しているように、陸軍が主張する長期持久戦略を主とするも、海軍が切望する米軍との短期決戦戦略をも許容するという矛盾を胚胎していた。

2 ミッドウェー（M I）作戦(1942/6/5)

G F司令長官の脅迫に屈した軍令部は、インド洋作戦中の艦隊を引き揚げ、G Fはミッドウェー作戦を敢行し、暗号電報も解読されていたこともあり、空母4隻、搭載機290機を喪失するという大惨敗を喫した。

こと此処に至って、軍令部はM I作戦及びF S作戦（米豪分断作戦の一環であるニューカレドニア、フィジー、サモア攻略作戦）を中止した。

3 ガダルカナル島の価値の発見と飛行場設営決定、そして死闘

基地航空に依存せざるを得ない海軍としては、ソロモン諸島域の制空圏を確保し、米豪遮断を期するために、ニューブリテン島の一大拠点ラバウル(ラバウル要塞と連合軍から呼ばれた。)から南東に1000 kmのガ島に注目し、5月下旬に同島に飛行場建設を決定し、8月初旬完成を目標に設営隊2000名を送り込んだ。尚、ガ島から南東900 kmにバツアナの米空軍基地（スピリッツサント基地）があり、ガ島はハワイと豪州を結ぶ線上にある。）

一方、米軍は日本海軍の動きを察知しており、飛行場完成まじかの8月7日米海兵隊第一師団18000名が上陸した。爾来、日米両軍はガ島で死闘を繰り広げ、大本営は12月31日ガ島からの撤退を決定し、撤退完了は、1943/2/8である。

4 何が問題か

(1) 開戦前の戦争指導構想にないM I作戦やガダルカナル島飛行場設営等の蛮行は、日本の戦争計画を破綻せしめた。長期持久態勢の構築も、インド洋作戦も中途半端になり、日本は戦争終末機会の捕捉を逸した。

(2) インド洋作戦の消滅は、腹案に云う「まず英の屈服を図る」が画餅に帰したことを意味する。インド洋作戦に期待したもの①インド独立に寄与 ②エジプト英軍への補給路遮断(米及び英国等からの補給) ③対ソ援助ルート阻止 ④援蒋ルート阻止

最も、日本の対ソ参戦を希望する独と中近東での日独連携による英国の早期屈服を希望する日本との戦略調整は為されなかったのだが・・・

(3) ガ島飛行場設営の件は作戦課同士では連絡あるも陸軍内部での情報共有はなく、現地陸軍は知らなかった。陸軍が守備するとなると準備時間を要する。

(4) 戦術はあるが、戦略眼なき大本営海軍部とは言が過ぎるか？

5 ガ島作戦に対する評価等

餓島、戦力集中競争に敗れた。情報軽視、兵站無視、科学的思考欠如、統合作戦思想なし、島嶼作戦に関する事前研究不足、連合軍の下算、地獄の戦場等々
海軍の尻拭いをした陸軍との想いも強い。

* 予期以上の大戦果が、判断を狂わせたのか？玉虫色の決着の孕む危険を感じる。徹底的な議論をせぬ日本の問題解決法の問題かも知れぬ。

(第二百一話 了)